

授業でのビデオ制作課題と「日越ビデオ通話」への応用の可能性

林 康仁 (Phuong Dong University 外国語学部)

竹上 健 (高崎商科大学商学部)

浅田旭彦 (Phuong Dong University 外国語学部)

Tasks Making Video in Japanese Classes and Expectations to "Japan-Vietnam Video Calling"

Yasuhito HAYASHI, Phuong Dong University

Takeshi TAKEGAMI, Takasaki University of Commerce

Asahiko ASADA, Phuong Dong University

要旨：(1)授業で学生が制作した日本語ビデオ課題と課題で見られた学生の学習振り返り、(2)ビデオ作品を投稿した SNS グループでの意見交換、(3)日本の大学と実施した課外学習「日越ビデオ通話」への応用について実践報告する。そして(4)本年6月に群馬県で開催された発表会でベトナム人学習者が発表を披露したことを報告する。

キーワード：ビデオ制作課題、学習の振り返り、日越ビデオ通話

1. はじめに

本研究では、ベトナム・ハノイの Phuong Dong University における日本語学科学生の日本語に関する授業を基準にしている。具体的には、2019年12月から2020年6月までの授業科目「音声」と、2020年8月から12月までの授業科目「会話5」であり、2つの授業はいずれも3年生を対象としたものである。このなかでの課題実習として、「日本語によるベトナム紹介」をテーマとした日本語のビデオ制作課題を課した。その制作過程とクラスでのビデオ視聴と学生の振り返り、その後のソーシャルネットワークサービス(以下 SNS と記す)を活用した、日本人との意見交換、そして完成したビデオ作品の中からいくつかを選んで新たに活用した、他の大学との協働学習「日越ビデオ通話」への応用の可能性について報告する。

「日越ビデオ通話」は2018年10月から、包括連携協定校である高崎商科大学と開始した活動で、今まで様々な手法を使用して活動を行ってきたが、参加者減少などのために定期的に継続できなかった。しかし、今回のビデオ制作課題を新たに追加したことで学生の自主的な参加があり、現在は継続し発展させることができている。

2. 授業でのビデオ制作課題

本章では、日本語学習における日本語によるビデオ制作の意義と、そのビデオの授業で

の活用の意義を述べる。

文字として後に残る作文と違い、会話など音声を使用する課題では、教員が学生の発話を聞いて評価する場合が多い。筆者も同様に学生への指摘が多く、学生にとっては単に教員から意見を受けるという形になり、日本語というものを学生に十分な実感を持たせることに苦労があった。

昨今の IT 技術の発展によって、スマートフォンでのビデオ撮影が身近な手段となり、学生たちも気軽にビデオを撮影することが可能になった。また、ビデオ編集については、インターネットを活用することで、無料で利用できる編集ソフトやその利用法についても知ることができる。ビデオ内に PR のための「透かし文字」が入っていても問題とせず、高度な編集レベルを要求しなければ、特に支障となることはない。学生たちがみずから日本語ビデオを制作して、完成したビデオ作品を授業で互いに視聴することで、自分たちの日本語表現を振り返り、自ら気付きを得られるのではないかと考え実践した。

「音声」「会話 5」の授業ともに「日本語でベトナムを紹介する」ことをビデオのテーマとした。ビデオ制作に関して指示した内容は、①最大で 5 人までのグループ作り、②ビデオ制作に関する打ち合わせ・スケジュール調整、③日本語によるアナウンスを入れたビデオ撮影、④日本語字幕・BGM を入れたビデオ編集、⑤YouTube へのビデオアップロードおよびビデオへのリンクの提出、であった。

表 1 に、制作された課題ビデオについてを示している。制作されたビデオの長さ（時間）は 4～5 分前後のものが多く、最長では 10 分を超えるものもあった。グループについては 1～5 名とばらつきがあり、平均すると 3.64 名/グループであった。メインテーマは大学がハノイにあるためか、観光が最多であったが、順に料理や外食など食事に関するものも多く、これは女子学生が多いこ

とが理由として推測される。その他としては「動物保護」や「日本語についての思い」であった。日本語のアナウンスのないものや日本語字幕のないものもあったが、内容が理解できないといったビデオは皆無であった。

表 1 制作された課題ビデオについて

ビデオ長さ(時間)	グループ数	人/グループ	制作ビデオのメインテーマ			
			観光	料理	外食など	その他
1分未満	0					
1分～2分未満	2	1	1		1	
2分～3分未満	5	2～4	2	2	1	
3分～4分未満	16	1～5	6	7	3	
4分～5分未満	17	1～5	6	7	4	
5分～6分未満	13	3～5	9	1	3	
6分～7分未満	8	3～4	2	1	4	1
7分～8分未満	2	4～5			1	1
8分～9分未満	2	3～5	2			
10分39秒	1	2	1			
合計 66			合計 29	合計 18	合計 17	合計 2

3 週間の制作期間の後に、学生たちが完成させたビデオを授業で視聴した。通り一遍としてビデオを撮影して完成させた学生も多かったが、自分たちのビデオ作品を自ら修正したいくつかのグループがあった。修正を行ったグループの学生に聞き取りを行ったところ、「日本語の説明がよくなかった」「日本語の文法をまちがえて話した」「ビデオ内容がわかりにくかった」などのコメントを得ることができた。学生からのこれらの発言は、自分たちのビデオ作品を振り返り、他の学生のビデオ作品とも比較しながら内省し、自分の作品をより良いものにしようと考えた結果であると判断している。これはビデオとして後に残

ったからこそ、制作した学生は振り返りを行った、また、行えたのではないだろうか。

3. SNS グループでのビデオ作品公開

完成した学生のビデオは学生たちに YouTube に保存させて、ビデオへのリンクを提出させた。筆者らは SNS で学生たちと日本側の支援者とグループを作り、そこにビデオを投稿するようにした。日本側メンバーには、日本語キャプションに対して気づいたコメントをグループ内やビデオ内に書いてもらうようにした。こういったことも、学生たちが自分のビデオ内の日本語を振り返る機会になったと判断している。

図 1 に、制作されたビデオ「テアイ寺の順路.mp4」に関するコメント例を示している。左写真では「水上（すいじょう）」の読みを間違っアナウンスしているために、読みを示したものであり、右写真では日本語キャプションの表現について、アドバイスを行なっている。こういった指摘やアドバイスは、どのようなビデオでも行うことができるのではなく、日本語のキャプションと日本語のアナウンスがなされているビデオに限定される。



図1 制作されたビデオ「テアイ寺の順路.mp4」に関するコメント例

4. 課外学習として「日越ビデオ通話」への応用の可能性

筆者らは学習活動が数回実施したことを成立の基準と考えてはいない。参加する学生たちが自ら積極的に活動に参加して、さらに活動が定期的に継続することを成立の基準と判断している。今までも教員が手伝うことで数回の活動は継続したが、その後に参加者が減少し継続しなかった。「日越ビデオ通話」は日本語による会話だけでなく、映像を併用する前提で始めた活動であるが、それ以外にも三か国の学生による会話など、これまで多くの取り組みを行ってきたが、継続しての活動には至らなかった。

図 2 に、日越ビデオ通話のために実践した取り組みの例を示している。左写真では日本でもベトナムでも人気の漫画「鬼滅の刃」をテーマに、ビデオ通話を行なったものであり、漫画本を示したり、スマートフォンの画像を示すなどして、会話を盛り上げる努力をした。写真右では、三か国の学生と大学教員を含む 10 人でのビデオ通話の様子を示している。赤倉ら(2006)は、日本と海外の大学を 2 地点と 3 地点接続で連結し、英語での意見交換などを行っている。アンケートによる分析結果から、3 地点接続のほうが学生は積極的参加の意識が高いとのことであったが、同じような条件であってもビデオ通話を継続させることは非常に厳しいことが分かった。



図2 日越ビデオ通話のために実践した取り組みの例

5. 竹上ゼミ留学生による日本語発表会での発表

日越ビデオ通話で、単に日本語を使ってコミュニケーションをとろうとしても、続かないことが分かったことから、今回、テーマを設定して、それに向かって活動することを実践した。高崎商科大学の竹上ゼミでは、地域の方々を前にして、留学生による日本語発表会の開催を企画していた。日ごろ、日越ビデオ通話を行っていたベトナム人学生に発表を提案したところ、1名の学生が発表を申し出た。それ以降、開催日の2021年6月19日の前日まで、ほぼ2か月の期間、毎週欠かすことなく、ビデオ通話を使って、日本人学生3名による支援を受けながら、発表のためのスライド制作や発表練習を行なった。

図3に、竹上ゼミ留学生による日本語発表会での発表を示している。図3(a)は、日本語発表会の様子をしてしており、写真ではベトナムからの男子留学生が発表している。写真の手前は、発表を聞く中国からの留学生である。図3(b)は、Zoomを使ってのハノイからの遠隔ビデオ発表の画面を録画したもので、右上に発表者の顔画像が表示されている。図3(c)は、発表者が5人のメンバーとともに制作した課題ビデオを、同じ発表スライドの中で再生できるように準備して再生したものである。右下部に「VIVAVIDEO」の透かしが見えており、インターネット上の編集ソフトを活用したことが分かる。

課題を設定することで、継続して日越ビデオ通話ができる可能性が見いだされたことから、今後は日本語能力試験合格を目指すなど、有効な課題設定を検討していく予定である。



(a)留学生による日本語発表会 (b)ハノイからの遠隔ビデオ発表 (c)制作した課題ビデオの紹介

図3 竹上ゼミ留学生による日本語発表会での発表

参考文献

赤倉貴子,永岡慶三,西堀ゆり. 2006.「国際間の3大学を結ぶ同時双方向遠隔授業が学生に与える効果—2地点接続と3地点接続の比較—」『電子情報通信学会技術研究報告』ET, 教育工学 106(166),pp.71-76.電子情報通信学会.